第六講　空所補充問題解法　30分

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

我が国は、移民や難民の受け入れにあまり積極的でない姿勢をしばしば批判されることがある。確かに、我が国の移民人口比率を見ると、欧米や他の諸国に比べて低い数値である。他方で近年は、少子高齢化による人口減少という局面を迎え、生産労働人口を維持するためにも、我が国は移民を受け入れる方向に舵（かじ）を切るべきであるという議論が論壇をにぎわせている。現在の安倍自公政権下においてのみならず、前民主党政権下でもしばしば言われていたことであるが、閉鎖的な我が国は、「開国」せねばならないというわけである。

本稿ではやや［ア］的な観点から、自由や平等や民主主義などといった自由民主主義が重視する諸価値との関連で、移民や人の移動について論じてみたい。とりわけ、A<u>ここで指摘したいのは、自由民主主義は人の大規模な移動を前提としていてはそもそも成り立たないのではないか、ということである。</u>

算数の問題ではないので、移民を受け入れるということは、単に人口がいくら減るからその［P］埋めにいくら補填する、という話では全くない。移民政策が、我が国が必要とする数だけ必要な人材のみを受け入れる、という極めて傲慢なものでないかぎりは、移民を受け入れるということは、移民を受け入れることができやすくなるように、社会や国のありかたそのものを変えるということであって、それは本来、社会や国のありかたとはどのようなものであるべきか、という議論と不可分であるべきである。だとすれば、移民の受け入れを称揚することの背後には、これまでのところある程度厳格にあった国境線を透過的なものにし、人の出入りを自由なものにし、［イ］的には国境線など取り払ってしまったほうがよいという政治社会のヴィジョンがあるはずである。しかしながら、こうした［I］な社会は望ましいところもあるのかもしれないが、少なくとも自由民主主義の諸理念とは折り合いが悪いように思われる。

　こうした点を考えるうえで、経済学者のアルバート・ハーシュマンの議論を紹介するところから始めよう。ハーシュマンによれば、人が社会や組織に積極的にコミットし、協働しようという契機は、少なくともそこから「離脱」するという選択肢が簡単には取りづらい状況において生じるということである。とりわけ自分がなんらかのコストを負担せねばならない状

況においては、「離脱」という選択肢を行使しない相応の動機が求められるということである。

ところで、あまり強く意識されることはないかもしれないが、自由民主主義に基づく社会は、その構成員が何らかの負担や責任を分有することによって成立する社会である。ここでは「平等」という価値に焦点を当てながら、この点を［Q］短に確認しよう。平等という価値は、とりわけ左派リベラルが重視する価値である。左派リベラルは、典型的にはアメリカの民主党がそうであるように、福祉国家、あるいは「大きな政府」を好む傾向がある。

こうした福祉国家的な諸制度、つまり所得などの再分配に代表される社会保障制度は、われわれが安心して生活を送るうえで必要不可欠のものである。けがや病気をしたときには、健康保険によって医療費の負担が軽減される。たとえ不幸にして職を失っても、失業保険が一定期間給付され、その間の生活は一定の水準を保たれ、安心して再就職先を探すことができる。老後に退職をしても、年金によってある程度の生活の安定は保障される。われわれの生はつねに何らかのリスクと隣り合わせであるが、社会保障制度によってそのリスクはある程度軽減され、各人が善き生を自由に探求できるのである。

ただし、重要なことは、社会保障制度はそうしたリスクを個人が直に負うのではなく、それに「社会」が［ウ］的に対処することで個人のリスクを低減することを目的としている、ということである。ゆえに、ある社会において社会保障制度を維持・運営していくには、その社会に属する諸個人に対して、おそらく一度も会ったことも、これから会うこともないであろう他者のために、みずからの利益の一部を税金や保険料などという形で供出することが求められる。これは言ってみれば、社会に対する自己犠牲である。すなわち、福祉国家的な枠組みは、その構成員がかかる自己犠牲を進んでみずから引き受けることを前提に成立するのである。

　では、なぜ人々はそうした自己犠牲を進んで引き受けるのだろうか。ここで政治哲学者のマイケル・ウォルツァーが、政治社会と他の集団や共同体を分かつ特徴として、政治社会が有する「閉鎖性」に目を向けている点に着目しよう。そもそも自由民主主義的な社会は［V］ヤヌス的である。それは一方で、極めて個人主義的な価値にコミットし、個人の自由や権利を強く擁護しようとするが、他方でそうした個人に対して、社会にかなりの程度のかかわりを持つように要求する。彼によれば、「交互に支える用意のある相互支援の政治体制がなければ、自由な個人からなる政治体制は存在しえないだろう」というわけである。だとすれば、人々のあいだに「交互に

支える用意」が生まれる契機はどこにあるのかということが問題になる。

　ここでウォルツァーは、政治社会を隣人関係と対比させて論じている。隣人関係とは、誰であっても出入り自由であり、自発的かつ場当たり的な結社である。だが、はたして隣人関係は長期的に安定的な結合を保つことができるだろうか。様々な要因で人は出入りを繰り返すのであり、そうしたなかで集団の結合力や結束力は弱まってしまう。他方で、政治社会とはそのようなものではない。彼によれば、政治社会とは「自発的結社」ではなく、「非自発的結社」である。すなわち、そこから自由に離脱することも難しく、入ることも制限された一定程度の閉鎖性を有する社会である。そして、個人が社会によってW いやがおうでも拘束されることが、個人に対して「その内部で行動しなければならない理由」を与えるのである。つまり、こうした共同体的な束縛、あるいは離脱不可能性が、共同体を長期にわたって安定的に存続させるための社会的協働の要因となるというわけである。

　そして、この点は「リベラル・ナショナリズム」の理論家が強調するところでもある。リベラル・ナショナリズムとは、端的に言えば、自由民主主義的な諸理念とのかかわりでナショナルなものを再評価し、「ナショナリティ」を自由民主主義社会の「動力源」であると捉える議論である。す

なわち彼らは、自由民主主義の諸理念を重視するリベラルであるからこそ、ナショナリティを一定程度［エ］的に評価するのである。

リベラル・ナショナリストからすれば、ネイションとは、先に指摘したような、ある種の自己犠牲を進んで引き受けようとするエートスを涵養(かんよう)する文化的文脈を有する集団である。すなわち、ネイションとは、みずからと一定の資質を共有する人々に対して抱く、いわば「関係性の感情」を有する集団なのであり、そのような感情は、「ある種の文化的社会的背景」を人々が共有することによって生まれるというのである。したがって、代表的論客のヤエル・タミールは次のように述べる。

> われわれが福利を考慮すべき「他者」は、われわれが気遣い、アソシエーションに関するわれわれのアイデンティティとかかわりのある他者である。共同体的な連帯意識は、親密さと共通の運命という感情、あるいは幻想を生みだすのであり、そうした感情ないし幻想は配分的正義の前提条件である。

かかるネイションは、その性質上ある程度の閉鎖性を有するばかりでなく、ある程度の閉鎖性を有していて**然るべき**である。というのも、ネイションが有する「ある種の文化的社会的背景」とは、言語・習慣・伝統・社会観など当該社会に長きにわたって蓄積されてきたものなのであって、

人々はそれらをその共同体のなかで生を営むことで半ば無意識的に習得していく。それゆえ、人々はそれを簡単に捨て去ることはできないし、部外者がそう簡単に共有できるものでもない。

　そして、ネイションへの帰属によって育まれる「関係性の感情」が自由民主主義的な枠組みを［R］支えするものであるとすれば、自由民主主義を［オ］的なものにするという観点から、ナショナルな文化的文脈がある程度保護されることが重要だということになる。ゆえに、誰がネイションの構成員であるかという成員資格の管理が求められるのであり、たとえば一度に大量の移民が流入するなどという事態は、できうるかぎり避けられなければならないということにもなるのである。

　［Ｉ］化し、［Ⅱ］性が極めて高まった社会においては、とりわけ自己犠牲を引き受けようとするエートスが涵養されず、長期的な社会的協働は難しくなるように思われる。「閉鎖的である」というのは実にネガティブな意味で捉えられることが多いように思われるが、ことに政治社会に関していえば、それが「閉鎖的である」ことの意味を、[B]望ましい政治社会のヴィジョンとの関連で、規範的な観点からいまいちど検討すべきなのではなかろうか。

　ここまで私は、社会に移民を「受け入れる」ことに焦点を当てて、ナ

ショナルな境界線の規範的な意義について論じてきた。しかしながら、ナショナルな境界線を［Ⅲ］的なものにするということは、入りやすくなるのと同時に、出ていきやすくなるということでもある。実のところ、この「出ていく」ということについては、あまり注目されることがないように思われる。だが、むしろ私は、国境線を取り払うことによって生じるリスクは、人の「流入」よりも「流出」にあるのではないかと危惧している。

　そもそも、社会が流動化したからといって、誰もが直ちに移動の自由を享受できるわけではない。移動の自由を享受できるかどうかは、移動できるだけの「資源」を有しているかどうかにかかっている。国境を越える移動となればなおさら、そうした資源を有しているのは通常、社会における「エリート」である。だとすれば、［Ⅰ］な社会というのは、実のところ移動の自由を享受できるエリートだけが、みずからの利益や機会を求めて移動を繰り返すことを可能にする社会なのではないだろうか。

　そうした社会において自由民主主義は存続できるだろうか。おそらくそれは難しいのではないだろうか。たまたま才能を陶冶する機会に恵まれ、大いに自分の能力を育むことに成功したエリートが、その果実を何らかの形でみずからを育んだ社会に還元することによって、他者もまた自己の能力を陶冶する機会に恵まれることになるだろう。しかしながら、エリート

がそのようなある種の「ノブレス・オブリージュ」を放棄し、みずからにとって利益をもたらさない社会からの離脱を積極的に志向するとすれば、あるいは、ある民主的帰結（たとえば高所得者の税負担を増すというような）が気に食わないからといって、当該社会から離脱しようとすれば、少なくとも福祉国家的な公共の枠組みは機能不全に陥ってしまうだろう。

　かかる観点からすれば、かつてオルテガ・イ・ガセットは、自由民主主義を脅かすのは「大衆」であると論じたが、現代ではむしろ、社会の流動性が高まったなかにおいては、自由民主主義を脅かすのは、先に述べたようなある意味での自己犠牲を負うことを放棄し、自己の利益の極大化を目指して移動を繰り返すエリートなのではなかろうか。

（白川俊介「ナショナルな境界線はいかなる規範的意義を有するか」による）

※注　政治社会……主権者による統治行為が行われている社会。
コミット……関係する。
ナショナリティ……国民性。
ネイション……国民や国家。
エートス……ある社会集団などに広まっている道徳的な慣習や行動

の規範のこと。
アソシエーション……一定の目的を果すために同じ関心をもつ人々が計画的につくった団体のこと。
ノブレス・オブリージュ……高い身分にともなう社会的責任や義務のこと。
オルテガ・イ・ガセット……スペインの思想家・哲学者（一八八三―一九五五）。『大衆の反逆』（一九三〇）という著作がある。

問一　空欄ア〜オに入るもっとも適切な語を、次のａ〜ｔの中からそれぞれ一つ選んで、解答欄に記せ。ただし、一つの語は一箇所にしか入らない。

ａ　安定	ｂ　外面	ｃ　危機	ｄ　究極	ｅ　経験
ｆ　肯定	ｇ　個性	ｈ　再現	ｉ　宗教	ｊ　集合
ｋ　象徴	ｌ　創造	ｍ　抽象	ｎ　挑発	ｏ　内面
ｐ　否定	ｑ　表象	ｒ　表面	ｓ　立体	ｔ　論争

問二　空欄Ｐ〜Ｒに入るもっとも適切な漢字一字を、解答欄に記せ。ただし、同じ漢字は入らない。

問三　空欄Ⅰ～Ⅲに入るもっとも適切な語を、次の1～5の中からそれぞれ一つ選んで、解答欄に記せ。ただし、空欄Ⅰは三箇所ある。

Ⅰ　1　エンドレス　2　シームレス
　　3　ボーダーレス　4　ホームレス　5　ワイヤレス

Ⅱ　1　受動　2　生動　3　反動　4　陽動　5　流動

Ⅲ　1　一過　2　看過　3　超過　4　透過　5　黙過

問四　傍線部Ｖ・Ｗの意味としてもっとも適切なものを、次の１～５の中からそれぞれ一つ選んで、解答欄に記せ。

Ｖ　ヤヌス的である
１　多義的である
２　有機的である
３　矛盾葛藤している
４　一定の傾向がある
５　二面性をもっている

Ｗ　いやがおうでも
１　嫌いでも好きでも
２　同意していなくてもいても
３　抵抗や反発があってもなくても
４　どんな事情があってもなくても
５　その気になっていなくてもいても

問五　傍線部Aで、筆者は「自由民主主義は人の大規模な移動を前提としていてはそもそも成り立たないのではないか」ということを「指摘したい」と述べている。次の文章はその論拠を説明したものである。空欄①〜④に入るもっとも適切な箇所を、本文の中から指定の字数でそれぞれ一つ抜き出して、解答欄に記せ（字数は句読点、記号、符号を含む）。ただし、同じ箇所は入らない。

自由民主主義に基づく社会の構成員は、社会を安定させるために、［①］（10字）を提供して、責任や負担を分有する必要がある。彼らが進んで［②］（10字）を引き受けるのは、彼らが［③］（9字）を共有しているからである。したがって、大規模に移動することが社会の前提となれば、部外者が大量に流入する一方、［④］（12字）す成功者は流出してしまい、自由民主主義を支える公共の枠組みは崩れてしまうだろう。

問六　傍線部Ｂ「望ましい政治社会のヴィジョンとの関連で、規範的な観点からいまいちど検討すべきなのではなかろうか」とある。筆者はどのような「観点」から「検討すべき」だと述べているのか。その説明としてもっとも適切な二十四字の箇所を、本文の中から「という観点から検討すること」に続く形で抜き出して、解答欄に記せ。ただし、解答欄には最初と最後の五字を記せ（字数は句読点、記号、符号を含む）。

［　24字　］という観点から検討すること

問七　本文の内容に合致するものを、次の1～8の中から二つ選んで、解答欄に記せ。

1　共同体を成立させるためには、構成員同士の隣人愛の実践が重要な鍵となる。

2　日本の手厚い社会保障制度は、移住を希望する外国人にとっても大変魅力的である。

3　自由民主主義を維持していくためには、その社会にふさわしい構成員を育成していく必要がある。

4　左派リベラルは移民の受け入れに寛容で、受け入れにともなうリスクについても十分考慮した政策を提案している。

5　自分たちの育った国や地域の文化を身につけた人物が、国境を越えて活動してこそ世界は国家という枠を破って一つになることができる。

6　自由民主主義の理念を脅かす要因は多種多様であるが、現在、注目されるのはエリートたちが大衆の自由を抑圧しようと暴走することである。

7　最近、日本でも経済力を維持・活性化するために、移民を受け入れる必要があり、国境の閉鎖性を解消するべきだという議論が高まっている。

8　個人がそれぞれの善き生を自由に追求することが自由民主主義的な

社会の基本であり、それを妨げるリスクを低下させることが政府の最重要課題である。

問一

ア	イ	ウ	エ	オ

問二

P	Q	R

問三

Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ

問四

V	W

問五

①	②	③	④

問六

〜

問七

第六講　空所補充問題解法　解答

問一

ア	イ	ウ	エ	オ
m	d	j	f	a

問二

P	Q	R
穴	手	下

問三

Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
3	5	4

問四

V	W
5	2

問五

①　みずからの利益の一部

②　社会に対する自己犠牲

③　共同体的な連帯意識

④　自己の利益の極大化を目指

問六

社会や国の〜あるべきか

問七

3
7